Combined Fleet Girls COLLECTION FAN BOOK

おしっこれくしょん 空母編 上

Piss-Colle Aircraft Carriers

Former Part

Volume 15 for ADULT ONLY

ある夜の第2空母寮集会室

龍驤「たらいま」
瑞鳳「おかえりー龍驤。景気どお？」
龍驤「いやー、アカンアカン。ホンマにアカン。爛れとる」
鳳翔「あら、演習で怪我したんですか？」
龍驤「イヤそれと違て……ん、おおきに。どっこいしょ。ほらアレや、司令官のシュミで霧島や青葉が駆逐の子ぉらの、その、ヤラシいもん撮ってたやんか」
瑞鳳「ああ、秋月ちゃんもやってたアレ……」
龍驤「アレな、もう鎮守府にすっかり広まってしもてん。アマツからの又聞きやけど、明石や間宮、伊良湖まで喜んで自分からやりよったらしゅうて。びっくらこいてパフェに式神落としてもうたわ」
鳳翔「あら、まあ」
龍驤「大丈夫かいなこの鎮守府の風紀」
隼鷹「いーじゃないのさ。オトコにひん剥かれてるわけじゃなし。年頃のオンナどうしスケベ心で盛り上がってんだから、どんどんやりゃーいいんだよ。乳繰りあえるうちが華だよぉ？　うぃっく」
飛鷹「いいこと言ってるふうだけど、あんた何に話しかけてんのよ」
龍鳳「……」
龍驤「……あ。ひょっとしてキミも潜水の」
龍鳳「……え、えへへ」
祥鳳「あらー。龍鳳のえっち」
龍驤「アカン！　みーんなスケベや！　爛れとる！」
鳳翔「でも……私は少し、暖かい気持ちになります」
龍驤「鳳翔ぉ……キミまでそないなこと言うんか」
鳳翔「あのころ、内海を出ていって還らなかったたくさんの子たちが、生きて、戦ってそして、そういう喜びを精いっぱい感じているんです。私には、とても素敵なことだと感じるの。……あらやだ、ごめんなさい、私ったらしんみりしちゃって」
龍驤「……ズルいなぁ。キミにそない言われたら、なんも言えへんやんか……」
隼鷹「ぐずっ。飛鷹ぉぉぉ。あたしらもヤろーぜ！　おっぱい見せあったりおしっこ出しあったりしよーぜぇぇぇ愛してるよぉぉぉ」
飛鷹「ちょ、何トチ狂ってんのよいきなり！　ええい酒くさ、むぐっ」
千代田「はいはい、公衆の面前で僚艦押し倒さない！　部屋でヤんなさい部屋で」
隼鷹「うぉぉぉぉ最大戦速じゃー!!」
飛鷹「ぃゃぁぁぁ……」
千歳「あーあー……瑞穂ごめんね、騒がしいところで」
瑞穂「いえ。私は毎日楽しいです。あなたにも再会できましたから。それに……鳳翔さんや隼鷹さんの言うことも……ね？」
千歳「……あ、あー。私たち部屋に戻りますね」
千代田「おねえと……ちちくり……だばぁ」
瑞鳳「……あの、祥鳳、龍鳳……」
祥鳳「オホン。これにて撤収いたします！」
龍鳳「えと、おふたりもごゆっくり……」

龍驤「……若いってええなあ」
鳳翔「龍驤さん、耳真っ赤」
龍驤「キミかて、その顔、タービン回りすぎちゃうん」
鳳翔「……ね。お部屋、戻りませんか」
龍驤「……そゆことはウチに言わせてよ。あほ」

秋津洲「あれー？　誰もいないかも……まいいや。お部屋戻ろっと」

航空母艦 鳳翔

下着姿

「新しいの買うたんや」「ええ。つうはん、というのをこの前」「ふーん」白と紺の真新しい下着に身を包んで、伏し目がちな腐れ縁の相方に目を細めるウチ。こーゆーんを着けとるって、空母はともかく駆逐の子ぉらは意外に思うかもな。おっ母さんなイメージ持たれとるんは知っとるけど、なかなかどうして。

胸部装甲

「私、これでも若いつもりです」頬を膨らませる鳳翔。「せやな。オッパイは小ぶりやけど、ハリもある」「やン」ツイ、と右の乳首のそばに指を滑らせると、敏感に反応。今の声は……他の奴らには聴かせたない。赤城や加賀にも。……海軍の、最初の四隻の空母ではウチが一番新入り。それまで鳳翔は赤城とも、加賀とも一航戦を組んどった。ウチも最初は赤城が相方や。んでも、結局一番長う付き合うたんはこの子やった。ま、太平洋の戦いの前やけどな。

陰部

ウチが沈んだあとの海軍は、そらもう大変やったらしい。艦娘っちゅうもんになって勉強して、恥ずかしい話、おいおい泣いてしもてん。お互い泣いて。この子と再会して、その後のことも聞いて、泣いて抱き合うて、……まあ、その日のうちにヤることヤッた。真っ先に生まれて、最後まで浮いとった鳳翔には、関わりの深いフネもぎょうさんおるけど、そん中でウチを選んでくれて……嬉しかったんよ。ウチには、こういう、ヤラシいところもさらけ出してくれる。「ホンマ、ヤラシいな……この真っ黒なジンジロ毛」「もう。いやらしいのは龍驤さんよ」……海の上では、フトコロに一本忍ばせとるんは、たぶんバレバレの秘密や。

性器

「……はい。どうぞ」にち、と少し音を立てて広げられた。「いつ見ても、ホンマ……ヤラシいかたちしとるわ、キミの」「あんまり言わないで」真っ赤になる鳳翔。下のほうは、赤いんは充血してぷっくり膨れたクリとか、ぬるぬるが零れそうな穴の周りくらい。ウチがよくくわえる大きなびらびらはすっかり変色しとる。「ええねん。ここ、めっちゃ好きや。指入れてすぐとろとろになるんも、イッたあとびらびらが震えるんも、全部ええ」「龍驤さんも……爛れてるじゃない」「しゃあない。こんなカラダで生きて、キミを愛してしもとるんやもん」

放尿

じゃー……アマツあたりが見たらびっくらこいて泣いてまうかもわからんような大股開きで、下品な音立てて、鳳翔がおしっこしとる。さすがにオトナの艦娘は海の上でもそない堂々と用は足されへんから、こーゆーんを見るんはウチの特権や。「かぁええ」手がいつの間にか股をいじっとるんを感じながら、かすれ声で囁いた。「チンコ生えとったら見ながら三回くらいコいとる」「龍驤さんにおちんちんなんて……いらない。今のままが、いいです」熱に浮かされたような声が脳に響く。

自慰

すごい勢いで、鳳翔の細っこい指が、クリの皮の上からオメコ全体押しつぶして、こね回しとる。ぐりぐり、ぐにぐにぐに、ぐいっぐいっ、にちゃ、にちゃあ、……下のほうから、白う濁ったどろどろがどんどん溢れよって、それをすくって塗って、またこねて。最近はウチら別行動も多くて、鳳翔が鎮守府で待機しとるあいだはいつも、こんなんらしい。ウチが戻った夜は、まあ、そんな感じ。〝昔〟の相方に、こない乱れるくらい想うてもらえるだけで、生まれ変わらされた甲斐があるっちゅうもんや。

航空母艦 龍驤

下着姿

「なんでクリスマスの帽子かぶる必要あんねん」怪訝な顔をする、下着姿の龍驤さん。「もちろん可愛いからです」私は力強く断言しました。当然ですよね？「……ま、ええわ。鳳翔のヘンな趣味は今に始まったことやない」『失礼な！』「駆逐の子ぉらにおイタしたらアカンで？」「そんな、ゆ……オホン、一部の方たちじゃないんですから。龍驤さんだけです」「そらおおきに。しかしこのガキンチョみたいなブラとぱんつだけは堪忍してや」「却下です」こんなに可愛いのに！

胸部装甲・陰部

「そないジロジロ見んなや……」「見ます。可愛いもの」航空母艦・龍驤の排水量は、船体のモデルになった青葉型重巡洋艦とさして変わらなかったのに、艦娘・龍驤さんはどうして駆逐の子みたいな体格になってしまったのでしょうか。提督や大淀さんも考えあぐねていました。船神さまの仕業だとして、その思し召しが私たちなんかにわかるとも思えないんですけどね。「あら。おまた、太い毛が」「あー。産毛に混じって最近な。百年もすれば鳳翔くらいボーボーになるやろ」「えぇ……」「そないしょげかえらんでもええやん」

性器

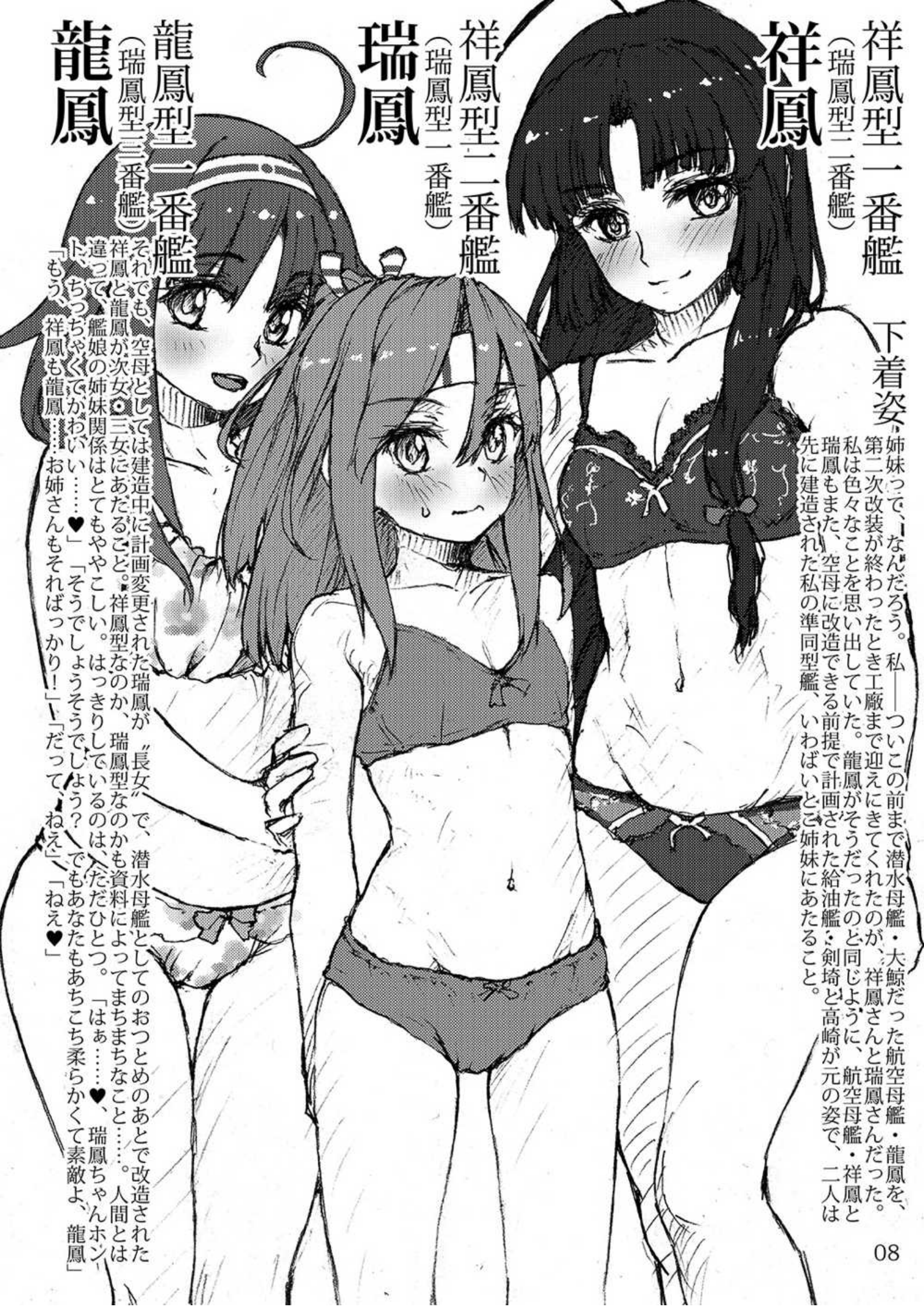
「まあ、キミはこのちんまいんが好きなんはわかっとる」「だからそれは、じゅる、誤解だと」「よだれ」……言い訳がましいですが、こういうパーツのひとつひとつが、今の龍驤さんをかたちづくっていると思えば、すべてが愛おしくなります。ほとんど見えないおさねも、未発達な花びらも、私の小指がやっとな入り口も。

放尿

時々、龍驤さんのお手洗いについていって、お小水を見せてもらいます。「まったくヤラシいな、自分」「艦娘ですから」しゅうぅ……と一直線に、勢いよく放たれるおしっこ。なんだか、二列になって急降下する艦爆隊のようで、少し懐かしくなってしまいました。「……これでまた、ウチが空けとるあいだ、オカズになる？」「はい。美味しく戴きます」「……もっと、ほしい？」

性交

おかん、お艦だなんて、軍令部の口さがないお歴々に言われたりしますが、子供のようにしがみつく龍驤さんの秘所を攻めたてる私は、欲望に衝き動かされるひとりの女にすぎません。私の見るところ、〝昔〟沈んだ大半の艦娘は、どこか飄々、淡々としているふしがあります。何事につけても。私のように生き残ってしまったほうが、かえって深く、烈しい執着にとらわれているようです。生き抜きたい。愛し愛されたい。抱き抱かれたい。犯し犯され、「あ、あ、あっ」龍驤さんががくがくと震え――おもらしをしました。思わずつられて、私も粗相を。他の誰にも見せない痴態を晒しあう私たちは、幸せです。



祥鳳型一番艦 祥鳳
（瑞鳳型二番艦）

祥鳳型二番艦 瑞鳳
（瑞鳳型一番艦）

龍鳳型一番艦 龍鳳
（瑞鳳型三番艦）

下着姿

姉妹って、なんだろう。私――ついこの前まで潜水母艦・大鯨だった航空母艦・龍鳳を、第二次改装が終わったとき工廠まで迎えにきてくれたのが、祥鳳さんと瑞鳳さんだった。私は色々なことを思い出していた。龍鳳がそうだったのと同じように、航空母艦・祥鳳と瑞鳳もまた、空母に改造できる前提で計画された給油艦・剣埼と高崎が元の姿で、二人は先に建造された私の準同型艦、いわばいとこ姉妹にあたること。

それでも、空母としては建造中に計画変更された瑞鳳が〝長女〟で、潜水母艦としてのおつとめのあとで改造された祥鳳と龍鳳が次女・三女にあたること。祥鳳型なのか、瑞鳳型なのかも資料によってまちまちなこと……。人間とは違って、艦娘の姉妹関係はとてもややこしい。はっきりしているのは、ただひとつ。「はぁ……♥、瑞鳳ちゃんホント、ちっちゃくてかわいい……♥」「そうでしょうそうでしょう？　でもあなたもあちこち柔らかくて素敵よ、龍鳳」「もう、祥鳳も龍鳳……お姉さんもそればっかり！」「だって、ねえ」「ねえ♥」

胸部装甲・陰部

「祥鳳さん。私、空母改装受けてよかったです……♥」なんとも糖分の高そうな声と表情の龍鳳。妹――瑞鳳の駆逐艦並といっていい裸身をガシ見しています。私や瑞鶴のひそやかな楽しみを、彼女も共有することになったのね。「私、子供じゃないもん……そりゃあ、祥鳳や龍鳳お姉さんみたく……ないけど」ちらちらと、私や龍鳳の胸元や下半身に注がれる視線。いいのよ、私のおっぱいならいくら吸っても。何も出ないけど。……あなたに対して姉らしく振舞えることなんて、何も思いつかないから。

私や龍鳳が潜水母艦を経験したことと、瑞鳳は最初から空母として竣工したことが、体格の差に表れたのでは、というのが大淀たちの見解。なによそれ、と頬を膨らませる瑞鳳もまた可愛かったけれど。本当に姉妹なの？と小声で呟いたのを、私は覚えています。……姉妹。横須賀で建造も滞っていた姉妹。お互いの戦う姿も知らないまま終わった姉妹……。「そんなときは、ね」図体ばかり大きくて筋肉質な私と違い、とっても女らしく愛らしい従姉が微笑みました。「裸のおつきあい、するんです。私も、潜水艦たちと、しました」

性器

「はい」「にゃああ!?」目の前で祥鳳……のあそこが広げられちゃった。くぱっって。「どう……？」祥鳳が涙目で声を震わせてる。恥ずかしいならしなきゃいいのに。お尻の近くまで毛がじょぼしょぼ生えてるけど、そこはピンク色でカタチもキレイで……ふが、ふがが。「瑞鳳ちゃん鼻血出しちゃって……♥　見たかったのよね。祥鳳さんのおまんこ」りゅ、龍鳳お姉さん……。私は……祥鳳を……、祥鳳と……。

「ね。見せてあげて♥」「ふぇ……」ふわふわする龍鳳お姉さんにやさしく撫でられて、あまあい声で囁かれて、催眠術にかかったみたいに毛も生えてない割れ目を自分で広げてた。どう見ても、駆逐の子みたいなそこを祥鳳が見つめてる。「可愛い……。でも、私のとだいたい同じかたちなのね」「お、同じ女の子……だもん」「それに姉妹」「！」いいのよ、と祥鳳が微笑む。「私でえっちなこと考えていいの。ちっともイヤじゃない。それで瑞鳳がひとりでして、気持ちよくなるの、私、嬉しい」「あ……あ」「やっと、瑞鳳のための何かになれるんだって、思うもの」……限界だった。「お……姉ちゃん」「なぁに？」「う、うあぁああ」

むかしのはなし

どうして先に沈んだんだ、という恨み言は原則、言いっこなしというのが、艦隊での暗黙の了解。誰も沈みたくて沈んだんじゃないし、大半の艦艇が撃沈された以上、キリがないから。とはいえ「原則」であって、そういう言葉を吐き出さないと前に進めないような関係なら、むしろ推奨される。そう……祥鳳さんに泣きすがっている瑞鳳さんのように。いわく、トラックを案内してほしかった。いっしょに羽根を休めたかった。いっしょにレキシントンをやっつけたかった。ソロモン海で、エニウェトクで、マリアナで、航空隊を発艦させたかった。エンガノ沖で……益体もない、幼い言葉の数々は、祥鳳さんに瑞鳳さんの身体ごと抱きとめられ、「私も、瑞鳳の戦いが見たかった」という一言で昇華された。お姉ちゃん、祥鳳お姉ちゃん。号泣しながら、噛みしめるようにこぼれ出る言葉。……色々な都合に振り回されたけれど、こうしていま、三人で求めあえるのなら、それもよかったのかもと、龍鳳は思います。

千歳型一番艦 千歳

下着姿

「最近また少し、お肉がついちゃって」〝昔〟みたく、姉妹で水上機母艦から軽空母になったとき、千歳お姉はがんばって身体を絞ってたの。サボりがちだった千代田に比べたらしゅっとして、カッコいいと思うけど……「瑞穂見てたら、ね」「そんな……瑞穂など、細いばかりで」……むー。お姉、また瑞穂……さんといちゃいちゃしてる。

胸部装甲

「胸も痩せたかったのよね。艦載機扱おうとすると重くて……」「そんなもったいない！」思わず大声出しちゃった。大淀さんによれば〝母艦〟だった象徴らしい（ず、瑞鳳……）。私たちの大きなおっぱい。疲れたときに吸わせてくれる、千代田の大好きな、大きな乳首。無くなるくらいなら深海棲艦に征服されたほうがマシ！

陰部

千歳お姉の身体はほんとうにきれい。どこにも無駄なんてない。下のお毛毛だってそう。必要なぶんだけ、必要なところに生えてる。千代田のはへんに広いし、瑞穂……さんのは濃すぎる。……別に、瑞穂さんが嫌いなわけじゃないのよ。お姉の〝昔〟の水上機母艦時代の相方さんだし。再会できて、二人とも泣くほど喜んでたし。千代田にとっても、従妹みたいなものだし。ただ……お姉と瑞穂さんのあいだに流れる、千代田には入り込めない空気がつらい。

性器

お姉とはよく、おまたの見せっこをする。けど、きょうは瑞穂……さんもいるからかしら、すごく恥ずかしがってる。「み、見える？」「わぁ……」食い入るように見つめる瑞穂さん。「どう？　お姉のおまた、綺麗でしょ」「なんで千代田が自慢するの……き、汚かったらごめんね瑞穂」「いえ、そんな。鮮やかに赤ぐて、濡れていて、とても綺麗で……いやらしいです」、う、またいい雰囲気に。

放尿

「瑞穂さん、お姉はおしっこもすごいのよ」「千代田ぁ、それ褒めてない……ん」じゃー、びちゃびちゃ……お姉のおしっこはいつも（何かおかしい？）勢いがいい。床にあっという間に水溜りが広がって、匂いが立ちこめる。少し手にとって、舐めてみる。瑞穂さんもおずおずと真似をする。とてもえっちな気分になってる……。

自慰

お姉も、千代田も、あそこが濡れやすい。ひとりで、ふたりでするとすぐにとろとろと溢れだしてしまうので、部屋でするときは何か敷かないといけない。だから、そもそも汚してかまわないところでえっちしたりもする。作戦行動中の休憩地点とか。「……千代田さんは、千歳さんととっても、仲良しなんですね」瑞穂さんがつぶやく。ごめんね。あなたの知らない軍艦千歳の戦いも、千歳お姉のことも、千代田はたくさん知ってる。いっぱい教えてあげるから…私の知らないお姉のことも、教えてよ。

千歳型二番艦
千代田

下着姿

ねえ千代田、あなた少し食べすぎなんじゃない？「うっ……だって間宮さんと鳳翔さんのコラボ新作があんまり美味しいから」肉付きのいい身体を縮こまらせる、私の愛らしい妹。私、千歳が身体を絞ったことで、ふっくらしたイメージがますます強まってしまったけれど、実はかなり筋肉なんです。長良さんや五十鈴さんには足のたくましさを褒められていました。ただ……わりと不精な子なので、最近は少しぷにっ……ぷよっとしてきたのが、寝床で抱きしめたり、身体を重ねたりするとき、気になるところ。瑞穂は、どう思う？

胸部装甲

「さ、触ってもいいのよ？瑞穂さん」ばいーん、と擬音をつけたくなる仕草で胸を張る千代田。私よりも大きな、正規空母たちにもひけをとらない（瑞鶴……）おっぱいだけれど、それ以上になんというか、張りと瑞々しさがあります。いえ、私も別にトシじゃない、つもりだけど。本人はひっこんでいる乳首が好きじゃないようす。

陰部

「素敵……」控えめなそぶりながら、けっこう遠慮なしに妹の身体をまさぐる、〝昔〟の相棒・瑞穂。そのまま、手が下腹部に伸びました。「や……」「柔らかいんですね、下の毛。千歳さんとは違って」処理をさぼりがちな千代田のそこは、私より薄いけれど、かなり広めに毛が生えています。入渠中、正直むらっ……と来るので、ちゃんとお手入れしてほしいわ。

性器

「ふぁ……」両手でそっと広げたとたん、千代田がかすれ声でうめき、そして、どろり、と本気のおつゆが溢れました。普段より多めなのは、頬を紅潮させた瑞穂が傍らで覗きこんでいるから。妹を辱め、悦ばせていることに、おなかの奥深いところがうずくような感覚を覚えます。「……私のと、少し、違うでしょう」「そう……ですね。お豆さんは、千歳さんより大きいです」「お豆さんだなんて。瑞穂のえっち」「だ、だって……」

「お姉、」泣きそうな声を上げる千代田。

……わかってる。千代田が瑞穂にやきもちを焼いて、私を取られるんじゃないかと怯えて、でも表に出せないくらいにはいい子なこと。……いっそ、空母の自分と水上機母艦の自分と二人いればいいのに、と思います。千代田のことも、瑞穂のことも、私はそれぞれに愛している、ひどく欲張りな女だから。

放尿

段差の上で、千代田が私たちに向けてお尻を突き出し、両手で思いきり左右に引っ張ってる。つまり、目一杯広がったおまんこが中までよく見える。その姿勢で、しゅうぅ……と、私と同じくらい勢いよく排尿させています。「すごい……女の子のおしっこが出るところ、こんなによく見えるんですね……千代田さんえっちです……ん、にがい」時々、びっくりするほど大胆になる瑞穂が、おまんこの間近に顔を近づけたかと思うと、おしっこの水流に口をつけてる。「みずほさんの、ばかぁ」あ、ダメだ。スイッチ入ったのを感じた。

後始末

「き、きれいに、したげる」我ながら情けないくらい息を乱しながらぃ排泄を終えたばかりの千代田の性器をねぶる。「あー、あーっ」だらだらと、涙と鼻水と唾液と、愛液を垂れ流して意味不明な声を上げる妹。……元々は、夜中恐慌状態に陥り、失禁してしまった彼女の始末をしていて、始めたことでした。あのとき真っ先に沈んだ私の知らない、軍艦・千代田の凄惨な最期の記憶が、彼女の心に今も重くのしかかる。心の安寧のために私が必要なら、いくらでも依存してほしい。きっと私もどこか歪んだままだから、こうして妹のおまんこを舐めているんです。「……千歳さん。千代田さん。瑞穂も、お役に立てませんか」瑞穂ぉ……。

水上機母艦　乙
瑞穂

下着姿

「なかなか、その……大胆な下着よね。前から気になってたけど」頬を染めて目を逸らす千歳さん。「そ、そうなんですか？　人間の女性の下着はよくわからないんですが、好きなのを選んでいいと提督にカタログを戴いて、こういうのがかわいらしいと思って」正直に答えましたが、「むー……お姉のこと誘ってるんじゃないの？」千代田さんに睨まれました……。――お二人は「水上機母艦　甲」として建造された、瑞穂の準同型艦です。

胸部装甲・陰部

千歳さんや千代田さんの豊かなお胸、まあるい腰つきに比べると、瑞穂はなんだか細っこいばかりでお恥ずかしいです。そのくせ、ヘシに毛深いですし……。「あのね瑞穂」千歳さんが頬に手を添えてきました。「私、艦娘のあなたを見て、とても嬉しかったの。こんなに綺麗で素敵な女性と十一航戦で僚艦だったのよって、千代田に胸を張れるから」「……」千代田さんが口をとがらせて目を伏せます。「瑞穂……さんのこと、別に、嫌いじゃ……ないから」「瑞穂も」千代田さんに微笑かけ、そしてキスをしました。「千歳さんや千代田さんが、こんなふうに瑞穂を迎え入れてくれて、本当に光栄です」

放尿

ぷしゅいいい……品のない音を立てて、千代田さんに広げられたおまたからお小水が飛び出し、それを千歳さんが片手で受け止めています。み、瑞穂、殿方のように、立ったまま……放尿しています。

「すごい、熱い」手のひらに溜まったぶんをすすり、また手にとって、また一口……いつしか、千歳さんはじゃくりあげていました。「瑞穂……帰ってきてくれたんだ……」

性器

「瑞穂さんの……、綺麗」千歳さんと、千代田さんとで広げられた秘所に、興奮しきったようすの千代田さんが見入っています。〝昔〟ずっと調子の悪かった機関がまたおかしくなってしまいそう……。「それにおつゆが……。すごい、えっちい……」「準同型艦、だからかしらね」「ふあぁ」おつゆをすくって、陰唇のあたりをさすりながら千歳さん。「三人して、濡れやすい、えっちな瑞穂も、千代田も、好き……ね、瑞穂の、おもしっこ見せて……」

吐露

内地へ戻ったと思ったら、いきなりいなくなって、淋しかったんだからあ。千代田さんと入れ替わったみたいに、激しく泣きじゃくる千歳さん。……蘭印作戦が一段落し、マカッサルで千歳さんと別れて母港の横須賀へ戻った瑞穂は機関を直してもらいました。そしてMI作戦のため呉へ向かう途上、潜水艦に雷撃され……。瑞穂が沈んだ日、千歳さんは呉へ戻ったんだそうです。ごめんなさい、今度はずっと、三人でいっしょにいましょうね。千代田さんも泣きついてきて、瑞穂たちは涙とお小水と唾液とおつゆでぐちゃぐちゃなまま、夜通し、肌を重ねました。

おう、龍驤に龍鳳。なんだよ、二航戦が揃って堂々と出歯亀に来たのか？「イヤ、うちは別にどうでもええねんけど、このエロガキがな」はっはっは、いいじゃん！　あんただって鳳翔さんと二発ヤッてきたんだろ？　まだ火照ってんならオカズにでもしてってくれよ。ホラどうよ、意外とスケベな身体してんだろ飛鷹。「こんのエロ親父……きゃ！」尻から太ももにかけてのラインとか、造形美を感じるねェ。

くっ……あなただって大概じゃないの。みんな言動に惑わされてるけど、こんな重たいものぶら下げて……！「おお、おいおい大胆だな」ふんだ。知ってるんですからね、ブラもパンツも提督の月給のン割ってくらいの高級品なこと。心は錦っでところかしら、**檀原丸**？「……」「そのへんにしとき。飛鷹」……ごめん、なさい……。「お二人とも、綺麗です。とても――どんな姿でも。みんな同じ思いです。あ号作戦で僚艦だった龍鳳の言葉、信じてください」

胸部装甲・陰部

「……綺麗です、お二人とも」さっきと同じ台詞を、蕩けきった表情でこぼす龍鳳。この子も大概よね……。「ホンマええ身体しよるわ、このひゃっはーは」どこかもじもじする龍驤。「オッパイ吸うかい？　鳳翔さんよかだいぶデカいぜ」「遠慮しとくわ。うちも命は惜しい」「あの、下の……」「ああ、まん毛は処理してるよ。まあ……心は錦、なのかもね。飛鷹の言うとおりさ」う……。「大丈夫だよ、怒ってないよ」隼鷹は笑うけど、私知ってるのよ。ストレスが表に出やすい私と違って、普段おくびにも出さない隼鷹こそ、客船になれなかった過去を忘れられないこと。……平気な顔してないでさ、怒ってよ。私にぶっつけてよ。

まあ飛鷹はさ、あたしなんかより全然意識高いよな。ホラ、つるっつる。「どこ見て言ってんのよ変態！」「飛鷹さん……あの、気を悪くなさったらごめんなさいなんですけど、その、少しはみ出してるのがすごくえっちで……」「龍鳳ぉ……本当、見た目によらないわね。まあ、駆逐の子とか、あなたの好きな小さい潜水の子みたいには行かないわよ」「わ、私そんなあ」はっはっは！　みんなエロくて重畳、重畳。いいじゃんか、船神さまだかなんだかからオンナの心と身体もらったんだ、楽しもうぜ、肉欲ってやつをさ。あたしは飛鷹の突き出たオッパイも、はみ出してるビラビラも、ツンケンしてるけど繊細なとこも好きだよ。ほんとはあたしなんかより全然、芯が強いところもさ。「……『あたしなんかより』って時々口にするところ、嫌い」

性器

「うっ」「あ！あー龍鳳、鼻血だばぁしよってからに」「りゅ、龍驤さんだって真っ赤じゃないですか！」見てみ飛鷹、あんたのエロまんこで二航戦の軽空母二隻が大破してるぜ。「し、知らないわよ……そんなえっちとかじゃないし、こんなの」いやー……舐めても届かないくらいちっちゃいクリとか、そんかわり黒っぽくて分厚いビラビラとか、見てるだけでムラムラすんだよね。鼻の頭にさ、剃ったところが当たってちょっとザラザラする感じがさ、あー飛鷹のまんこ舐めてんだなあたしって実、感できて「何を力説しだすのよいきなり……」また会えてよかったな、って心底思うんだよね。「……ずるい」

ぎゃ、逆襲よ！　見なさい龍驤、龍鳳、こいつこんなんだけどここは子供みたいなんだから！「おほー、飛鷹にくぱぁされちゃったよ」「お、おう、ホンマや、見かけによらんなぁ」「ピンク色でかわいいしえっち……うっ」わっ龍鳳また！「わはは、まんこに鼻血垂らされて生理中みてーになっちゃった。飛鷹、どう？エロい？」ば、馬鹿……。「飛鷹はさ、責任感も使命感もあたしなんかより全然強くて、ほんと尊敬してんだけどさ。もっと、色々なこと楽しんでほしいんだ。あたしのガス抜きとか、そんなこと考えなくてさ。えっちしたいからえっちする。おしっこ飲みたいから飲む。それでいいんだよ」わ、私は……「あたし、飛鷹とえっちしたい。今ナウ」

放尿

目の前で、隼鷹が自分で広げてるあそこがひくついている。私は頭がしびれて何も考えられなくて、本能的に自分のおっぱいをつかみ、胸を突き出した。「出すよ……」しょろっ、と最初の雫が尿道口からこぼれたかと思うと、すぐに、しゃああぁ……と水流になり、私の胸元を直撃。びしゃびしゃと、鼻先や顎にも跳ねる。隼鷹のおしっこ、熱い。いつかサンフランシスコまで行こうよと言ってくれる、あんたがマリアナのあとの地獄を見なくてよかったと抱きしめてくれる、愛してると唇を重ねてくれる、私の愛しいひと。イってるのを自覚しながら、激しく迸る尿を浴び続ける。

「あ、あ、あっ」しゅううぅ……龍驤と龍鳳に足を支えられながら、まんぐり返しに近い格好で飛鷹がおしっこを出す。あたしは間近で、逃すもんかと舌で受け止めながら飲み下す。羞恥と興奮と快感が入り混じって正気を失いかけても、あたしから目を離さない。まんこの穴のほうからはとろとろとエロ汁が伝う。ねえ、飛鷹。コイツは、酒よりいいんだ。客船になりたかった、せめて復員船として最後の奉公をしたかったと、今でも泣きわめきたくなるのを、酒はもちろん、あんたがいるからやりすごせるんだ。愛してる。飛鷹。愛してる。

水上機母艦 秋津洲

下着姿

「自分、何しとん？」素っ頓狂な声を上げる龍驤。秋津洲の部屋を訪れた、彼女と私――千歳の目線の先には珍客がいました。「あ！！」陽炎、休憩入ってまーす……ナンチャッテ」「下品すぎるかも!?」下着姿で、健康的な肢体を惜しげもなく晒しながら、背格好のほとんど変わらない水上機母艦にべたべたと絡んでいる、いつもにぎやかな駆逐艦。「あらまあ。〝昔〟縁があったとは聞いてたけど、ずいぶん仲良しさんなのね」「たはは……」縮こまる美少女二人。

胸部装甲

秋津洲っちゅうんは、要は飛行艇の保母さんや。水上機母艦言うても、瑞穂やら、まだ居てない日進とは違て、自分で戦う艦やない。艦娘の秋津洲が来るいうんでどんな子やろかと思とったら、これがまあ那珂ちゃんがビビるくらいの美少女で、あっという間に人気者なりよった。那珂ちゃんよかオッパイも全然デカいしな。ただ……案の定戦いにはあんまり向いとらんで、チイとばかり浮き気味やったんは確か。うちも鳳翔も心配しとった。実はマイペースな本人以外、どの艦娘も秋津洲を案じとったらしい。みんなええ子やな。

陰部

「別にあたし、お情けでこうしてるわけじゃないわ」「少しむっとしたよ」うすの陽炎。「ソロモンでばたばたしてたころに補給してもらった縁もあって、お話するようになって……それで、まあ。なんたって可愛いもん！」やれやれ、女たらしさんね。神通も手を焼くわけだわ。

渋る龍驤を言いくるめて、そのまま出歯亀を決めこむことにしました。とうとう素裸になってしまった二人を見比べると、同じような背丈でも陽炎はまだまだ[illegible]の体型。対して秋津洲はメリハリのついた成長っぷり。髪と同じ、不思議な色合いの少し多い陰毛がきらきらと光を反射して、綺麗です。

性器

「……きれい」ボイラー爆発寸前みたいな、真っ赤な顔の陽炎が、あたしが自分で広げた……を凝視してる。あたしも死にそうかも。みんなの足引っ張ってるって自覚はあった。そういうの表に出さないよう振舞ってたけど、あたしだって軍艦、立派にご奉公したいもん。みんなが気にかけてくれるのは嬉しいけど、少し惨めかも。そこいくと陽炎は、ほんとに気を使ってとかじゃなくて、あたしと友達になりたいんだってわかったの。良くも悪くも、裏表のない、単純でまっすぐな女の子だから、あれだけみんなに好かれるのかも。あたしも好き。不知火や神通に張り合って独り占めしたいわけじゃなくて、きっと艦娘……人間として惚れたんだ。もちろん、えっちしていっしょに気持ちよくなりたい欲もあるかも、だけど……。でも、普段勝気なのにこういうときにヘタレるのはまだまだ[illegible]かも！

放尿

海の上でするみたいに、しゃがんだアッキーの少し開いたあそこから、じょー、じょろろろっておしっこがたくさん出てる。補給とかするから多いのかしら。濃いめの色とか、匂いとか、脳みそ直接殴られるくらいえっちで……。艦娘のおしっこは下の妹たちで見慣れてるし、神通さんのだって見て興奮したことがあるけど（本人は未来永劫忘れてほしいらしい）、その、おかずにしたのは、アッキーのがはじめてで。だってこんなにえっちだから……。「……拭いてほしいかも」いつのまにかおしっこの終わったアッキーが蚊の鳴くような声で言った。

自慰

「……何か言ってよ龍驤」「自分こそ……」「……秋津洲っていくつくらいに見える？」「艦娘の年っちゅうのもナンセンスやけど、軽巡とおんなしくらいかなぁ。駆逐の子おと並ぶと年子の姉妹って按配やな」「……そういう子と駆逐の子が、え、えっちしてるの見た感想は？」「……部屋戻ったら鳳翔押し倒しそう」「……右に同じ」「はぁ。生きるってええな！」

おしっこれくしょん・お蔵出し編

「大丈夫だ」
いつもの調子で、ぶっきらぼうに差し出された、ブレザーの上着。それに隠れるようにして用を足す。どうしてだろう。洋上で用を足すことなんて珍しくもないし、仲間どうし、女どうしという気安さもあって、何人かの駆逐艦娘で並んで、なんてこともしばしばだ。だけど。
どうしてだろう――このひとの前でそうすることが、今すぐ泡となって消えてしまいたいほどに気恥ずかしい。早く終わってほしいのに……限界まで溜めこんでいた、薄く色づく小水の勢いは衰えを知らない。羞恥と、絶対に認めたくはない、少しの快感の入り混じった、こんな気持ちにどうしてなっているのだろう。そもそも、この気持ちは、何なのだろう。

「大丈夫だ」
彼女が尿意に耐えきれなさそうなのはすぐにわかった。旗艦の阿武隈に合図を送り、小休止。よくあることだ。どうしてだろう。仲間どうしなのに、女どうしなのに、彼女が用を足す姿を他の艦に晒したくないと思った。だからブレザーを脱ぎ、覆い隠してやった。彼女が弱々しくそれをつかみ、腰を下ろすのが感じられ――鋭い水音が耳朶を打ち、何故か動揺した。喉元まで心臓がせり上がってくるようだ。主砲を撃ち尽くしたあとのように顔が熱い。どうしてだろう。僚艦が傍らで排泄しているだけ。それだけのことに、どうしてこんな感情を覚えるのだろう。そもそも、この感情は、何なのだろう。

おしっこれくしょん　改二編　上
Combined Fleet Girls Collection FAN BOOK Vol.15

発行日　2016年05月08日

発行サークル　LUNATIC PROPHET
web http://circle.lunaticprophet.org/
pixiv id=92903

発行人　有村悠　Yuu Arimura
e-mail edgeoftheseason@gmail.com
twitter id=@y_arim

印刷所　株式会社　くりえい社
web http://www.kurieisha.com/

produced by Lunatic Prophet
2016.05.01.

いや、ホントありえへん。